いま食卓の向こう側にあるもの
～「食育」とは？～

「ひよっこ料理人」「玄米せんせいの弁当箱」「家栽の人」作者の魚戸おさむ氏に聞く

食育は、「食」の入り口が「口」であることから、最近の歯科界では重要なテーマの一つとなっている。同時に、多職種が関わるテーマであり、栄養素、好き嫌い、調理、味覚、咀嚼、生活習慣、児童虐待、咬合、歯並び、ひいては齲蝕、歯周病など、さまざまな観点から議論されている。しかし、食育とは何か、いま一つ焦点が絞り切れていないのではないか。それは、食が日常生活そのものだからなのか…。

食とは何か、そして食育の一つのあり方を示唆する作品に「ひよっこ料理人」がある。作者は魚戸おさむ氏。魚戸氏は、あの「家栽の人」の作者でもあり、そのヒューマンタッチな作風には定評がある。今回は、「ひよっこ料理人」に絞って、食育はもとより、生きることと食べること、料理を作ること、登場人物に歯科医師を設定した背景、今後の歯科・歯科医師への期待感も織り交ぜて伺ってみた。聞き手は、広報・ホームページ部の小林顕部員。

【プロフィール】
うおと／おさむ。北海道函館市出身。1957年5月9日生まれ。本名は魚戸修。1985年に『わんぱっくコミック』掲載の「忍者じゃじゃ丸くん」でデビュー。代表作に「家栽の人」「イリヤッド- 入矢堂見聞録」「玄米せんせいの弁当箱」。また、共著の絵本「いのちをいただく」ほか。「ひよっこ料理人」は現在、小学館のビッグコミックオリジナルに好評連載中で、コミック本は1～8巻が発売中。

「食」に関する遍歴

―小林顕部員　料理や食や食品への関心はいつ頃から持たれたのですか。

◆魚戸おさむ氏　小学校五年生の時、早食いで不健康な食生活をしていた父が、がんで亡くなりました。その父が「危険な食品」に関する本を読んでいたことがあり、私も手に取りました。その経験が私に「食」を強く印象付けたと感じています。

作品テーマを「食」に設定

―そのほかにも食に関する決定的なできごとは。

◆魚戸氏　三十歳頃、幕内秀夫氏の「粗食のすすめ」に出会い、また、私自身が結婚して家庭を持ったこともあり、食や食卓を気遣うようになりました。しかし、ある種のもやもやとした疑念が残りました。そして四十代も終わりの頃、福岡県の西日本新聞社が発行した「食卓の向こう側」に出会い、目からうろこが落ちました。そこで、同社に連絡をとり、「私をこの本を創るメンバーに入れてほしい」と懇願し、その一員にしていただきました。編集関係の方々や多様な職種の人たちとの交流の中で、素晴らしい出会いと経験を積みました。その時の経験から、「食」をテーマとした漫画作品を制作できる―との気持ちが湧き上がりました。ちょうど、連載作品に一区切りがつき、小学館の編集者から次期連載の相談があったので、迷わず「食」を申し出ました。これが後日、「玄米せんせいの弁当箱」となりました。ただ、制作には心細い点もあり、アドバイスや資料収集をバックアップしてもらえる人をお願いしたところ、ストーリー作家兼任で北原雅紀さんと組むことになり、一緒に三年半、連載をしました。

馴染みやすい主人公に「ひよっこ料理人」誕生秘話

―さて、「玄米せんせいの弁当箱」の次に「ひよっこ料理人」が登場します。その制作の経緯などを。

◆魚戸氏　純粋に自分で描きたい作品を制作し、世の中に伝えたいとの思いが強くなり、編集者に具体案を伝えると認められました。

―伝えたかったことは。

◆魚戸氏　最初はストーリーの中に物事の「裏側」も描写しようとも考えました。そのことを含め、師匠と仰ぐ村上もとか先生（「JIN―仁―」の作者）に構想を相談したところ、「それではジャーナリスティックになりすぎてしまう。主人公が教える側の人では、情報の押し売りになって作品全体が暗くなってしまう。魚戸君自身も暗くなってしまう。それよりも、食べることが楽しくなるような漫画、魚戸君も楽しくなるような漫画を描いたほうがいい」と指摘され、迷いが吹っ切れた気がしました。ならば、主人公はもっと身近な存在、一般の人と変わりのないような人物を据えれば、読み手に親近感を持たれ、伝えたいことも届きやすくなるのではないか、と考えました。そして、主人公には、子ども料理教室を開く普通の一般女性の今田妃代子。父は歯科医師の秀好。秀好は元岡山大学病院小児歯科の岡崎好秀教授がモデルです（容姿は別ですが）。岡崎先生とは「食卓の向こう側」時代の交流で出会い、今でもアドバイスやご意見をいただいています。さらに、作品のストーリーには食とともに恋愛や子育て、さまざまな生活シーンを描写しています。そこで伝えたいことは、食卓や台所に留まらず、その「向こう側」にあるものです。

歯科との接点は高校時代 伝えたい食や食卓の風景

―歯科・歯科医師との接点はほかにありますか。

◆魚戸氏　高校生の時、歯の状態が悪く、近所の女性歯科医師に診てもらった時、「このままだと二十歳までに歯が全部抜け落ちる」と宣告されました。私は重度の歯肉炎で、この先生から初めて歯に関する知識、正しいブラッシング指導、歯茎が出血している際のブラッシング方法を教わりました。そのため、今も自分の歯は残っており、自分の歯で噛んでおいしく食べています。その時のことがとても印象に残っています。

―「ひよっこ料理人」では、食を通じて家族関係や家庭環境、問題のある食生活を写すシーンが登場しますが、その内容や食育的考えなどは誰を意識して描いていますか。

◆魚戸氏　連載中の漫画雑誌は中年以降の、いわゆる普通の〝おじさん〟が読んでいます。当初の狙いの一つは、「おじさんたちに台所に立ってほしい」ということでした。しかし実際には、おじさんが買った漫画をその奥さんが読み、さらに子どもたちが読んでいるとのこと。また、夫婦で台所に立ったり、奥さんと子どもがレシピを見ながら料理したりと、かなり女性の読者や支持者が多い状況になっています。食育については、まず親に教え学んでもらい、生活で実践していただく。そして親が納得し受け入れたことを子へと伝えるのが基本だと思います。そうでないと、上っ面だけで終わってしまうでしょう。

―妃代子の父で歯科医師の秀好ですが、歯科に関しては特に「噛み合わせ」を語るシーンがたびたび描かれています。その理由について。

◆魚戸氏　岡崎先生から「食」の入り口が「口」であると伺い、噛み合せの重要性を教わったことが大きく影響しています。

―主人公の妃代子には、どなたかモデルがいらっしゃるのですか。

◆魚戸氏　作品の料理監修者で子ども料理研究家の鈴木真由美さんです。作中の料理レシピにしても、グルメまがいのものではなく、誰でもトライできること、料理の基本を伝えることを目的に、とても分りやすく作っていただいています。

父秀好の言葉で歯や口腔の大切さを伝えたい

―これからの歯科、歯科医師について何か一言。

◆魚戸氏　歯科医師に限らず、歯や口腔内の大切さを訴える医療関係の方たちがいます。その方々の話を聞くと、皆さん、同じ方向を向いています。少数派ではありますが、学校の先生にもいらっしゃいます。そういった皆さんが一緒になったら、すごい医療が実現すると思います。歯科の先生方も歯や口腔、食に関して大切なことを人々に伝えるために苦労されています。私はそこを、歯科医師秀好の言葉を通じて代弁できればと考えています。

―日頃、大切にしている言葉はありますか。

◆魚戸氏　「初心忘るべからず」でしょうか。実は私が漫画を初めて書き始めたのは小学校三～四年生の頃で、同級生にもう一人、漫画が好きな友だちがいて「将来は二人で藤子不二雄のようになろう」といっていました。しかし、その友だちは中学一年の時に漫画描きをやめてしまい、以来、私一人で描き続けています。当時の漫画を描いていた時の感覚は今でも忘れられません。ペンで線を引いた時の感覚、胸躍る感じ…。あの時の「最初の感覚」は今でもペンで線を引く時、思い出すことがあります。いつまでも、忘れたくないですね。

―本日は貴重なお時間をさいていただき、ありがとうございました。　了